身近な小さなことから、学び考え行動する必要

藤枝　　高校３年　片ノ坂保澄

今回福島県、宮城県に行くという企画の事を橋本先生から聞き、前々からボランティアに行きたいと思っていたため、参加することを決めました。参加することを決めた日からは、不安と緊張がありました。震災からもう２年以上が経ちますが、福島の人々の今の気持ちが分からなかったからです。どんな思いをされているのか、どのような言葉をかければよいのか色々考えてみました。

初日は石巻をまわりました。壊れた橋、津波から逃げるために登った日和山など、ニュースで見る風景とは感じるものが違い、圧倒されてしまいました。また、その場その場で説明を聞くたびにその風景が思い浮かんできたのです。１日目は震災の傷跡を見て自然の厳しさに、ただただ呆然としてしまいました。

二日目、福島の高校生・大学生・大人の皆さんのお話を聞いたとき、農業の方や漁業の方が、それぞれ震災以降、自分たちで勉強して放射線という見えない敵と戦ってきたということを聞きました。漁師さんの言葉から悔しいという感情がにじみ出ていました。その気持ちに寄り添う一方で、消費者の目線から見れば、いくら安全といわれても大切な人に食べさせるものとしては危険なものなのです。それは農業の方も漁業の方も理解していました。だからこそ悔しくてやるせない気持ちだったのだと思います。

漁業の方はもうひとつ話してくれました。それは若い漁師に対する心配でした。普通漁師の皆さんは高校を卒業したぐらいから船に乗り、漁に出ると聞きます。大人の皆さんもそのとき漁をするという楽しさ、自分がとった魚を食べて喜んでいる人をみる喜びを知るそうです。しかし海に出られない今、若い漁師がそれを知らないで大人になってしまうということを心配をしていました。僕はそれはとてもつらいことだなと思いました。一生の仕事というのは憧れもあり必ず自分に喜びを与えてくれるものだと僕は思っています。その喜びや憧れを失ってしまっては苦でしかないと思いました。学生の方々のお話では「原発によってふるさとが汚されてしまった」と話してくれました。

福島に来て風景がきれいで心地よく、何度も写真を撮りました。しかし、僕が見たその風景も他県の人から見たら、放射線の飛び交う危険な場所と思うかもしれません。でも福島の方々にとっては、大事なふるさとであり、そのことを僕達は忘れてはいけないと思いました。

三日目、仮設住宅に行きハンカチ等を作っている方々は、お会いした時疲れてしまっていた僕達をあたたかく迎えてくれました。皆さんの笑顔に僕は久しぶりに幸せな気持ちになりました。こんなに自分がその場にいて喜ばれたのは初めてかもというくらいでした。そのとき僕は内心泣きそうでした。でもこんな時に泣きたくはありませんでした。後で聞きましたがその方々たちは息子さんやお孫さんが福島から避難してしまっている方々でした。

仮設住宅を後にして福島大学に向かいました。その中では測定器があったり支援センターがあったり異様な光景でした。しかしその中では未来のために様々な研究が行われていました。

最後に仮設住宅に住む菅野みずえさんに話を聞くことができそのときに菅野さんが「あなたがたはまだ 3 月 10 日を生きてます。私達は 3 月 11 日を越えてしまいましたがあなた達はまだできることがあるのです。」とおっしゃいました。その言葉は震災を経験した方でしか発する事のできない心に響く言葉でした。三日目に思ったことがそれぞれしっかり足を進めているんだなということです。

三日間で様々な光景・心にふれてきました。その中で僕はこの旅で強く感じたことがあります。

それは学び考えるということです。僕ら３月１０日を生きている人々は３月１１日以降を生きている人々を悲しませないように学び、そのためにどのようにしたらいいのかを考えなければなりません。

こんなことを書いたら怒られるかもしれませんが原発をなくすとか国が悪いとか訴えるのもいいのかもしれませんが学生の僕にはそんな大きなことじゃなくて、もっと小さい身近なことでも学び考え行動することがあるなと、なんとなく答えを見つけることができました。

3 日間とても充実した旅でした。